

## 平成28年度前期 授業改善計画書

学 部 名	看護学部
学 部 長 名	吉田 俊子
<b>1. 学生の授業アンケート結果から、学部全体で改善すべき重点課題(3つ挙げる)</b>	
①	授業アンケートからみて教員に改善を求めているが（資料のわかりやすさ、内容、話す速度等）、授業改善計画に反映されていないものがある。教員の自覚も必要ではあるが、次年度にむけてもカリキュラムマップに沿った関連科目間相互のチェックが必要ではないか。
②	演習などの技術練習で、イメージが困難、教員間の指導に相違があったという学生からの意見がみられた。手技など確実に修得していくには、事前、事後、自己学習の提示の仕方の工夫が必要ではないか。
③	授業評価の学生の参加・回収率の低さは、従来は高い回収率があったことから至急改善を要する。対応は学生に声掛けだけでは難しいと考える。看護の学生はまだPCを講義時もっていない。またリ sponsカードで毎回やりとりしていく科目も多いことや、従来は授業評価の回答時間を設けていた科目も多く、今回の結果に影響していると考ええる。
<b>2. 上記のそれぞれの課題を解決するために必要な取組</b>	
①	関連する講義科目間での講義内容の一貫性、資料の適切さなどの確認や連携
②	演習課題等について、事前学習課題の設定やデモンストレーション、自己学習の充実
③	学生の意識を高める取組や、フィードバックの工夫も必要ではないか。
<b>3. 上記のそれぞれの取組を具体的にどのように進めていくか</b>	
①	学部から提出された授業改善計画書について教授会（教員会議）での共有をはかることにより、現状と課題把握を学部全体で行っていく。次年度のカリキュラムマップと併せて、連動する科目教員間での講義内容や資料の相互確認を実施する（教務WGにて推進）。
②	上記、教授会確認により資料を共有し、専門科目担当者会議にて、各領域での技術演習での状況把握、教育方法、内容、学びの振り返りとの確認と連携（教務WG、および実習WG）をすすめていく。
③	学生の意識を高めていくには、授業評価のコメントには、リ sponsカードで取り上げたような内容についても盛り込むようにして、学生の授業評価が講義の改善につながるように学生とのコミュニケーションをはかっていく。次年度施行にむけ、回答時間を設けたりする工夫も必要かもしれない。
<b>4. 参考となる良い授業改善事例について、学部全体でどのように共有するか</b>	
教員会議は、教員間のコミュニケーションの場であり、工夫を行った例を随時紹介していくとともに、具体的な事例や取組については、学群、研究科FDにおいて共有をはかっていく。	

## 平成28年度前期 授業改善計画書

学 部 名	事業構想学部
学 部 長 名	風見 正三
<b>1. 学生の授業アンケート結果から、学部全体で改善すべき重点課題(3つ挙げる)</b>	
①	授業運営における Moodle の活用が十分ではなく、今後は、出席システムと連動した学習支援システムの充実を図ることが求められる。
②	シラバスにおける予習・復習の記載が明確ではなく、今後は、講義の理解を深めるための体系的な授業計画や効果的な伝達方法の検討が必要となる。
③	学部や学群の特性や履修モデルを踏まえながら、効果的なアクティブラーニングの検討を進めていく必要がある。
<b>2. 上記のそれぞれの課題を解決するために必要な取組</b>	
①	Moodle の操作方法や活用方法について定期的に講習を行うとともに、技術を習得している教員から理解が進んでいない教員へのサポート体制を検討する。
②	予習・復習の進め方について理解を深めるとともに、参考となる事例を共有し、授業計画への反映を進めていく。
③	各教員のアクティブラーニングの理解度を確認し、科目の特徴を踏まえたアクティブラーニングの方法論について学類やコース等で検討を行い、ソフト・ハードの整備を進めていく。
<b>3. 上記のそれぞれの取組を具体的にどのように進めていくか</b>	
①	Moodle の活用法を学べる教科書の購入やわかりやすいハンドブックの作成（スチューデントセンターWG）を進め、教授会（教員連絡会議）にて、教職員の情報共有を開始する。
②	予習・復習のあり方について文献等の収集を進め、現在の予習・復習の実態を踏まえて、現状を理解し、それぞれの講義の予習や復習のあり方について、スチューデントセンターWG にて検討を行う。
③	アクティブラーニングのプログラム開発について、学科+学類の連絡会議で検討し、それらを、教授会（教員連絡会議）及びFDで共有するとともに、施設・予算委員会で環境整備計画について検討を進めていく。
<b>4. 参考となる良い授業改善事例について、学部全体でどのように共有するか</b>	
効果的な授業改善計画の事例を整理し、教員連絡会議等で情報共有を進めていく。 FD等の機会では授業改善計画の進捗をシェアする機会を設けていく。	

## 平成28年度前期 授業改善計画書

学 部 名	食産業学部
学 部 長 名	西川正純
<b>1. 学生の授業アンケート結果から、学部全体で改善すべき重点課題(3つ挙げる)</b>	
①	各教員とも授業の理解度を深めることに重点を置いているが、内容の難易度が高く理解が進まない学生が少なからず存在している。難しい箇所はより丁寧な説明を行う必要があるが、その一方カリキュラムマップに沿った関連科目の基礎から応用への連続性などの再チェックが必要であると考え。
②	上記に関連するが、予習復習など授業外での学修ができていない。事前、事後、自己学習について教員側から適切な課題提示や学修方法の説明などが必要であると考え。
③	授業評価の回収率が従来に比べかなり低く改善が急務である。従来は授業時間の終了間際に回答時間を設けていた教員が多かったことから、最終授業での声掛けだけでは不十分と考える。
<b>2. 上記のそれぞれの課題を解決するために必要な取組</b>	
①	授業の終わりにコメントカード等で質問や疑問点を提出させ、次回の授業で詳細に解説すると共に、ピア・サポートシステムの導入を推進する。また、関連科目間の講義内容の一貫性・連続性を確認する。
②	学生自らが復習時間や予習時間を設ける仕組みとして作りとして、宿題や小レポートを課したり、適時小テストを実施すること、さらにグループ討議など学生が能動的に学修へ参加するアクティブラーニング型授業の導入を一層推進する必要がある。
③	新入生はパソコンを購入することから授業時間内での回答が可能と考える。2、3、4年生、院生については、意識を高める取り組みもさることながら、授業時間内、或は終了後にコンピュータラボに向かわせ回答させる工夫も必要と考える。
<b>3. 上記のそれぞれの取組を具体的にどのように進めていくか</b>	
①	授業改善計画書については、4、5月の教員会議や教授会、学科会等で情報の共有化をはかる。また、関連科目間の講義内容の一貫性・連続性については、学群・研究科教務ワーキングチームを中心に確認作業を実施する(4～5月)。ピア・サポートシステムについてもSSC、学群・研究科学生ワーキングチームを中心に推進する。
②	事前、事後、自己学習についての学修方法の必要性を4、5月の教員会議や教授会、学科会等で周知・共有化を図ると共に、宿題や小レポート等の活用法やアクティブラーニング型授業の技法に関する講習会を学群・研究科教務ワーキングチームを中心に企画・実施する。
③	授業評価のコメントに、授業毎のコメントカードから授業改善に繋がる内容を盛り込むことなど、学生からの声が随時授業改善に活かされるように取り組んで行く。また、授業時間内、或は終了後に授業評価の回答時間を設けるなどの工夫について、4、5月の教員会議や教授会、学科会等で協議する。
<b>4. 参考となる良い授業改善事例について、学部全体でどのように共有するか</b>	
教員会議や教授会で事例を紹介すると共に、アクティブラーニング型授業の技法を含め模擬授業のミニFDを適時開催し、情報の共有化を図る。	